

『六朝通鑑博議』の孫吳論について

はじめに

田中 靖彦

南宋における三國時代をめぐる評価については、「北宋の曹魏正統論が南宋において蜀漢正統論へ転換した」という切り口から論ぜられる傾向にある。斯かる論が主流を占めた大きな要因としては、やはり『四庫全書總目』史部一・正史類一『三國志』の論の影響力が大きいであろう。

其書（＝陳壽『三國志』）以魏爲「正統」。至習鑿齒作『漢晉春秋』、始立異議。自朱子以來、無不是鑿齒而非壽。（中略）壽則身爲晉武之臣、而晉武承魏之統、僞魏是僞晉矣。其能行於當代哉。此猶宋太祖篡立近於魏、而北漢南唐蹟近於蜀。故北宋諸儒、皆有所避而不僞魏。高宗以後、偏安江左、近於蜀、而中原魏地全入於金。故南宋諸儒乃紛紛起而帝蜀。

「陳壽の『三國志』は魏を「正統」とし、習鑿齒が『漢晉春秋』を著し初めてこれに異議を打ち立てた。朱熹以来、習鑿齒を是とし、陳壽を非とせぬ者はいない。(宋は)高宗以後、(中原を失陥して)江東に割拠して仮に落ち着いたが、これは蜀と(境遇が)近い。そして中原の曹魏の領土であった地はすべて金(の支配下)に入った。ゆえに南宋諸儒は紛々として蜀を(正しい)帝であるとした」という主旨の論である。この論を代表として、三國時代をめぐる歴代の議論は、蜀漢と曹魏による二極対立という構図によって語られてきたという印象を持たれることが多い。そしてこのことは、孫吳に関する言説の展開については注目されることが少なかった、ということをも物語っている。それでは、孫吳政権をめぐる歴代の議論は果たして等閑に付されるべき内容のものだったのであるうか。

前掲『四庫全書總目』は、南宋諸儒が蜀漢に肯定的であった理由を、南宋の境遇が蜀漢に近いことに求めている。この説が強い妥当性を有することは確かであるが、この点から論ずるならば、『四庫全書總目』が指摘する「偏安江左」という南宋の境遇は蜀漢よりもむしろ孫吳に近いというべきであり、それでは「なぜ南宋において孫吳正統論は起こらなかったのか」という点は疑問として残るであろう。

本論では斯かる点に着目し、南宋の人々が抱いていた歴史観を探る一つの材料として、南宋代における孫吳を中心とした六朝評価について、『六朝通鑑博議』を主な手がかりとして検討するものである。

一・ 同時代の孫吳論概観

南宋における孫吳をめぐる言説は、確かに魏蜀に関するそれと比べたとき、確かに多くはないが、無いわけではない。例えば朱熹は、孫權について以下のように述べている。

致道問孔明出處。曰、「當時只有蜀先主可與有爲耳。如劉表・劉璋之徒、皆了不得。曹操自是賊、既不可從。孫權又是兩間底人。只有先主名分正、故只得從之。」(以下略)

「(略)學者皆知曹氏爲漢賊、而不知孫權之爲漢賊也。若孫權有意興復漢室、自當與先主協力並謀、同正曹氏之罪。如何先主纔整頓得起時、便與壞倒。如襲殺關羽之類、是也。權自知與操同是竊據漢土之人、若先主事成、必滅曹氏、且復滅吳矣。權之姦謀、蓋不可掩。平時所與先主交通、姑爲自全計爾。」(以下略)

(いずれも『朱子語類』卷一百三十六・歷代三)

朱熹によれば、孫權は劉表・劉璋と曹操との中間の人であるといい、また、孫權が劉備に協力せず關羽を襲殺したことを根拠に、彼には漢室復興の意思は無かったと断言する。朱熹は、「孫權は自らを、曹操と同じく漢の領土を占め取った存在であり、劉備の大業が成就したならば曹操とともに滅ぼされるであろうと自覚していたから、劉備とよしみを結んだのは暫時の保身の計に過ぎぬ」という。かなり批判的な孫權評価であると見て良い。一方で朱熹は「学者たちは曹操が漢の賊であることは知っていても孫權もそうであることは知らない」とも言っており、これに従えば当時において孫權への批判は曹操へのそれほど強くなかったことになる。ただしこれも、朱熹が「世間はもつと孫權を厳しく評価すべきだ」と見ていたことの表れであることは疑いがない。また管見の限り、朱熹の著述には周瑜・魯肅といった人物に対する目立った言及自体が無い。かかる朱熹の孫吳への否定的見解は、蜀漢や諸葛亮を中心に三國時代を見る彼の史観の関連から捉えることが可能であろう。

蜀漢正統論を説いた書として知られる蕭常『續後漢書』(1)は、決して孫吳の「正統」を認めず、孫吳人士に関する記録は「載記」として扱っている。これについては別稿を準備中であるが、蕭常『續後漢書』吳載記における孫吳政権および人士への評価は肯定的なものも散見されることも指摘しておきたい。

南宋における孫吳をめぐる言説についての数少ない先行研究として、伊藤晋太郎「洪邁『容齋隨筆』の三國論」(田中正樹編『中國古典學の再構築』汲古書院、二〇二二年)によると、洪邁の孫吳論は、將領では高評価な人物もいるが君主へは批判的で、そこにあるのは「評価すべき点は評価するという態度」であり、「南宋と同様に江南で樹立した國家としての孫吳には愛着や親近感というものを抱いているようには見受けられない」という。

上掲のような南宋における孫吳論からは、決して孫吳の存在が当時において等閑視されていたわけではないことが分かる。ただしその論にはいくつかの立場が見受けられるものの、大きな着目を集めていたとまでは言えないという印象もまたぬぐいがたい。朱熹の論に顕著なように、孫吳評価はあくまで蜀漢との位置関係から論ずるもの、はっきり言えば蜀漢のおまけ的な位置づけであるという傾向は確かにあるように思われる。

だが南宋代には、上述のような観点とは異なる観点からの孫吳論も存在した。北方と対抗した六朝の一つとしての側面に着目した孫吳論である。

南宋代には、置かれた状況が類似している六朝を先例として、南宋の採るべき方策を検証するという動きが見られた。本論ではこういった動向に着目し、魏蜀対立のおまけとしてではなく正面から孫吳政権を論じた史論として、『六朝通鑑博議』に着目したい。

二、『六朝通鑑博議』の内容

(一)『六朝通鑑博議』について

李燾は『續資治通鑑長編』でもあまりにも有名な人物であるが⁽²⁾、『六朝通鑑博議』(以下『博議』)は、その李燾の著述であるといい、同著の序論によれば、正式名称は『六朝制敵得失通鑑博議』という(後述)。同書は全十巻で、構成は、六朝それぞれについて、歴史事件をいくつか取り上げ、その事件の経緯を簡単に紹介したうえで⁽³⁾、それに対する見解を「臣燾曰」として論ずる、という構成になっている。

ただしこの『博議』は従来あまり顧みられなかった史料であり、後述する『四庫全書總目』も指摘するように、『宋史』巻三百八十八・李燾傳にも同書の名は彼の著述として載っていない。これについて張文濤「李燾《六朝通鑑博議》析論」(『史學史研究』二〇一八年二期。以下「張論文」)は、同史料が『四庫全書』によって広く知られるようになった史料であることを指摘した上で、四庫全書本が「知不足齋」蔵書楼で有名な浙江鮑家が献呈したものであり、内容も宋代の畢萬裔宅富學堂刻本『李侍郎經進六朝博議』と裏付けがとれることから、偽書ではないと論じている。同史料の標点本である『六朝事迹編類 六朝通鑑博議』(南京出版社、二〇〇七年。南京稀見文獻叢書第二輯。叢書主編・李海榮・金承平)は、前掲の宋本を底本とし、四庫全書本や中華書局本『資治通鑑』を元に校訂を行ったと明記している(同書所収、王能偉・胡阿祥「導讀」)。本論では、こういった先行研究の指摘に従い、前述した宋本の影印本『李侍郎經進六朝通鑑博議』(北京圖書館出版社、二〇〇三年)を底本とし、前掲標点本、四庫全書本を参照した。

(二) 『四庫全書總目』の指摘について

『四庫全書總目』は、『博議』について、以下のように述べている。

『六朝通鑑博議』十卷〔浙江鮑士恭家藏本〕⁽⁴⁾

宋李燾撰。(中略)此書詳載三國六朝勝負攻守之迹、而繫以論斷。案燾本傳、載所著述、無此書之名、而有『南北攻守錄』三十卷。其同異無可考見。核其義例、蓋亦『江東十鑑』之類、專爲南宋立言者。然『十鑑』徒侈地形、飾虛詞以厲戰氣、可謂誇張無實。此則得失兼陳、法戒具備、主於修人事以自強。視李舜臣所論、較爲切實。史稱燾嘗奏孝宗、以即位二十餘年、志在富疆、而兵弱財匱、與「教民七年可以即戎」⁽⁵⁾者異。又孝宗有功業不足之歎、燾復言、「功業見於變通。人事既修、天應乃至。」⁽⁶⁾蓋其納規進誨、惟拳拳以立國根本爲先、而不侈陳恢復之計。是書之作、用意頗同。後其子壁不能守其家學、附合韓侂胄之意⁽⁷⁾、遂生開禧之兵端。然後知燾之所見、固非主和者所及、亦非主戰者所及也。(『四庫全書總目』史部四十四・史評類『六朝通鑑博議』)

「李燾の本傳に彼の著述としてこの書〔博議〕の名は無く、『南北攻守錄』(の名)はあるが、その異同は調べようがない。(南宋の李舜臣の著)『江東十鑑』が言葉を飾って戦意を奨励しており、実が無いのに対し、この書は得失両方を述べ、手本・鑑戒の両方を備えている。その主旨は人事を治め自強することであり、『江東十鑑』と比べて切実である。史の記載によれば李燾は國の根本を建てるのを先にし、恢復の計を大言するようなことはなかったとあるが、この書の意図と頗る同じである。のち、彼の子の李壁は韓侂胄の意に迎合し、開禧の出兵につながった。しかる後に李燾の所見が和平派の及ぶところではなく、また主戦派の及ぶ所でもないということが知れたのである」という指摘である。『博

議』に関する先行研究⁽⁸⁾の多くは、六朝を鑑戒として南宋の現状に活かそうとする『博議』の意図を読み取っているが、上述の通り、その指摘はつとに『四庫全書總目』によって行われていることが分かる。また、『博議』の北伐に積極的でない姿勢を看取し、「李燾の所見が和平派・主戦派いずれの及ぶ所でもないということを知れたのである」と高く評価する。加えて興味深いのは、『博議』と同様に南宋のために立言する意図を持った書として、李舜臣『江東十鑑』が挙げられていることで、当時において六朝を以て南宋の鑑とする観点は『博議』のものではなかったことが分かる⁽⁹⁾。

(三) 序論・總六朝形勢論

以上のような点を踏まえ、『博議』本文を卷一から見ていこう。

序論では、「天下を統一した帝王は、地勢・民心・兵・將・事機の五つの具を備える必要があり、六朝は、將と兵こそいたものの、地・民・機を兼ね備えたものは無かった」といい、それらの実例が挙げられるのだが、地については、蜀の地を劉氏が得て孫氏が得られなかったため東西を兼ね備えられなかったことが述べられている。これについては後にも論ぜられる論点となっている。そして、「吳から陳までの三百年間、皆この五つを兼ね備えることができず、これが天下を統一できなかった所以である。こういった過去の事例を採録分類して批評するが、長所のみを採録せず、失敗についても述べ、そこから自分たちが得るものを求める」といい、漢の建安五年から陳の禎⁽¹⁰⁾明二年までについて論じ、『六朝制敵得失通鑑博議』と名付ける、とある。

ここから読み取れる『博議』の主張として確認しておきたいのは、「南宋の目指すべきは天下統一」という論旨である。論の中で「一天下」「混一區夏」といった表現を用い、六朝がそれを達成できなかった理由を鑑とし、五つの具を兼ね備え、天下の統一を目指す、という彼の主張が明確に見て取れる。ただし、中原奪回と天下統一は南宋の國是であり、

「こう主張する他なかった」という見方もできるのであつて、『博議』の北伐をめぐる真意については、さらに検討する必要があろう。

続けて「總六朝形勢論」は、六朝の防衛と北伐についての総論的な内容となつてゐるのだが、本論の関心から興味深いのは、ここに見える「若夫東晉・宋・齊・梁・陳之君、雖居江南、中國也。五胡・元魏雖處神州、夷狄也。其事又與孫・曹不同」という論である。同文は続けて、苻堅や太武帝の南方征伐が失敗したことを論じており、ここからは『博議』に華夷の弁別意識があるとする先行研究の指摘⁽¹⁾の妥当性が確認できるのだが、これは当時の南宋士大夫の多くに共通して見られる要素と捉えることができよう。むしろ着目すべきは上述引用中における曹魏の位置づけである。「東晉南朝は江南におるとはいえ中國であり、五胡北魏は神州におるとはいえ夷狄である。これは孫・曹とは異なるのだ」というこの文の主張からは、少なくとも『博議』には、曹魏を金と同一視して憎み貶めるといった観点は無いことも確認できるのである。

こういった「序論」と「總六朝形勢論」に続いて、六朝の各論に入る。『博議』は比較的長文であるため、ここでそのすべてを見ていくことはできないが、以下、『博議』の孫吳観を見ていこう。

(四) 吳論

各王朝の論の冒頭には、それぞれの総論的な文章がある。同史料における本論の主な関心の所在である吳論は、以下のように書き出されている。

臣燾曰、必有合天下之勢、然後可以一天下。三國鼎立、曹氏據魏、地廣兵強、奄天下之半。孫權以一隅之半、

則其勢力必不加於魏、而君臣相謀、連荊益之險、合東西之勢、以抗北方、最策之得也。(中略)臣謹按、魏之攻吳、凡三大戰、戰而輒敗者何哉。南人之勢、或合於荊、或合於蜀。用東西全力、則可以制敵而取勝。(中略)使吳蜀之地、約從締交、首尾相應、如此三戰、而摩之以歲月、操雖強、亦未必不爲吳蜀所吞。惜乎。合淝爲敵有而不敢取、西蜀藉外交而不能固、是以止於自守、而不圖進取之功。孫權坐此、有志而無成。(中略)後之有天下者、版圖所有、既得吳蜀之全、不必力戰以爭、連衡以取、而形勢之地、盡爲我有、則非復昔日三國之吳矣。若能以此進圖北方、混一區宇、爲孫權之所不能爲者、豈不偉哉。(以下略)

ここで強調されているのは、吳・蜀が合することの重要性である。張論文も『博議』の特徴として「江蘇・安徽・湖北南部・四川の地区を扼守すること」を強調する」と指摘しており、これが『博議』の重要な論点の一つであることは間違いない。『博議』によれば、孫權にとって最上の策は東西の勢を合して北方に対抗することであり、吳蜀が連携して戦った時はいずれも北方に勝利しており、吳蜀が合して月日を重ねれば曹操ですら吳蜀に併呑されていたかもしれないという。そして同論は続けて、吳蜀の連合が強固でなかったがゆえに、孫吳は自らを守るに止まったと惜しむ。そして同文の終盤にて、「吳蜀の全きを得て北方へ進出して天下を統一し、孫權のできなかったことを成し遂げれば、なんと偉大なことか」と言っている。つまり『博議』は、「南宋は吳のように蜀との連合に苦慮する必要は無いから、孫吳よりも積極的に北伐に打って出られる」と説いていることになる。この主張について注(3)所掲載胡阿祥論文(以下「胡論文」)は、宋の君主を激励したものであると説く。確かにそういう側面は強いだろう。ただし後述するように『博議』は、北伐や天下統一を勧める論を説く一方で、北伐に積極的であるとは言いがたい側面も強く認められるのであり、彼の全体的主張がどのような点にあるかについては、さらに続けて検討する必要がある。

上掲のような吳論の總論的文章に続けて、孫吳の政策に関する具体的論評が述べられる。總てを挙げることはできないが、重要なものをいくつか見てみたい。

「命周瑜破曹操於赤壁」では、赤壁戰の果たした意義が述べられる。赤壁の戦いを「守りのために攻勢に出た戦」と位置づけ、この勝利が後の孫吳にとって大きな成果であったと讃える。そして同論は、曹操がその後積極的に南方に打って出なかったのも、曹丕が吳討伐を謀るや群臣がこれを諫め、彼の代には大戦がなかったのも、赤壁の勝利の影響だと論じ、赤壁の戦いを「何と偉大ではないか」と讃えている。

「借劉備荊州」⁽¹²⁾では、「大事を為すには「權」が必要である」とし、劉備に荊州を貸し与えるのは、かつて劉邦が韓信に齊の地を仮に与えたことと同じだと説く。そしてこれに反対した周瑜を「土地を割讓して英雄が創業することが失策だとは知っていても、土地を貸して英雄を役することの利を知らぬ」と批判し、一方で魯肅の見解を張良に比して讃えている。劉備に対する肩入れが微塵もないということも興味深い。

「曹操徙濱江州縣近内以避吳兵」では、孫權の出兵は守るための攻撃であった、と説く。

臣燾曰、(中略)孫權以此而守江東一方、抗魏拒蜀、内外禦之不暇、而又歲歲出師、拔皖口、襲蘄春、而數圍合淝。豈其守禦誠有餘力耶。蓋示之以不憚、形之以好戰、使魏之疆場鯁鯁焉畏而備矣。則吳之權重。故曹公慮其見掠、而徙⁽¹³⁾江西之衆。滿寵畏其來伐、而遷合淝之城。以曹公之雄、滿寵之畧、尚畏而避之、則其所守、豈憂不固。苟不先之、則魏必知吾所欲者在守、所憚者在戰、歲出重兵、臨江而扼之、則吳之力困於備魏、而不得休息矣、安能致曹公、滿寵之畏哉。後之有國者、當使人備己、而後可以希孫權之守云。

「孫權が本来は防御に暇が無かつたはずなのに連年出陣したのは、余力があつたのではなく、好戦的であること、はばかりが無いことを敵に示したのである。だから曹操は呉に侵略されることを恐れて江西の衆を移住させ、滿寵は合肥城を移したのである」と分析し、實際成果を挙げてみると孫權の戰略を高く評価する。そして、むしろ攻勢を見せなければ逆に孫吳が連年攻撃される側になつてたであろうと説き、「後世の國をたもつ者は、相手に（こちらから積極的に攻撃を仕掛けてみせることで）己に備えさせるべきであつて、その後初めて孫權のような守りを固めることが望めるのである」と論じている。ここには、南宋の國防に関する『博議』の見解が凝縮されており、興味深い論とみるべきであろう。当時の南宋の論者は主戦派か和睦派のどちらかに分類される傾向があつた観があるが、『博議』はどちらでもなく、彼の主張は「最初から守る姿勢を取るだけでは駄目だが、攻め込んだからといってそれが必ずしも中原恢復を完遂するための出兵とは限らない」という、非常に現實的な観点であることが分かる。

現實的な批評はさらに続く。卷二「周瑜請并吞梁益、據襄陽以圖北方」では、益州を併合し、襄陽を拠点として北伐せんとした周瑜の卓見を高く評価し、彼の死によりそれが成らず、益州は蜀の手に落ち、襄陽は魏に帰してしまつたと惜しむ。ここからもやはり、『博議』には孫吳による天下統一が成らなかつたことを惜しむ意図こそあれ、蜀漢の天下統一を願う意図は全く見えないことが分かる。

「徙治建業」では、建業こそ都として最上であるとし、武昌へ遷都したことを厳しく批判する。陳愛平「南宋對六朝南北軍事對峙經驗的理論研究」（『沙洋師範高等專科學校學報』二〇〇六年三期）によれば、南宋における主戦論者は、「臨安を都とするのは妥協・降伏であり、南京を都と定めてはじめて北方進出ができる」と見なしていた、という。これを以てただちに『博議』が熱心な主戦派であつたと論ずるべきではないが、ここで展開されている論が軍事的側面に着目したものであることは確かである。

「作濡須塢」では、孫權が呂蒙の進言に従い濡須水に塢を建てたことを論ずる。孫權が陸遜らに武昌・建業を守らせ、自らは濡須にて魏軍の前進を食い止め、その隙に合肥を包囲し、壽春を襲撃したという戦略を、劉邦・劉秀の戦術であるとし、「孫權がもしその志をみたせば、天下は平定できたであろう」とまで言っている。歴代の漢籍でよく見られる「古の偉人に比して高く評価」という手法が確認できるが、この論もやはり「南宋も天下統一は可能だ」という論として読むことができる。ただし後述する史料で明らかのように、『博議』は孫權への批判的評価も数多く下しており、ここでの賞賛もあくまで「讃えるべきは讃え、批判すべきは批判する」という史論の範疇であるように思われる。

卷二に入る。「命陸遜討平山越、強者爲兵、羸者補戸、得精卒數萬人」では、陸遜の山越討伐と自軍編入、戸籍組み入れを高く評価している。同論では、「戦國の秦が韓を後回しにして巴蜀を討伐し、諸葛亮が魏吳を放置して南夷を討伐したのは、その財を得て國力を増強するためであつた」という先例を挙げた上で、「吳の山越は秦の巴蜀、蜀の南夷であり、陸遜の対山越政策は江東確保にとどまらず天下を兼併することのできるものであつた」という。ここでも『博議』は天下統一に言及しているが、裏を返せば『博議』にとって、民と兵の確保がなければ天下統一は難しい、ということでもあつたのであろう。なおここでは諸葛亮を倣うべき先例として例示していることが注目されるが、朱熹のような「諸葛亮絶賛」という論調ではないことや、蜀漢こそ天下を統一すべき王朝だという主張でもないことも確認しておきたい。

「初、魯肅常勸孫權⁽¹⁴⁾撫輯關羽⁽¹⁵⁾禦曹操、呂蒙以肅言爲非是」では、魯肅と呂蒙の關羽に対する見解の相違について、以下のように論じている。

臣燾曰、智者謀國、必雜以利害。借力於黨、足以傾敵、而其失也、亦足以自傾。酈食其謀於漢、欲立六國後而分項羽之力、而張良不可。魯肅用於吳、欲撫輯關羽⁽¹⁶⁾以多曹操之敵、而呂蒙不行。蓋楚漢間諸侯、視強弱以爲去就、使楚或強、六國復撓而從、則漢之事去矣。漢強則爲黨、漢弱則爲敵。智者謀國、而反益敵於銜弱之際、豈可謂功哉。吳魏交爭、關羽⁽¹⁷⁾中立、進則拒魏、退則病吳。魯肅欲加撫輯、與之同仇、以蹙曹操、操故可蹙也。使羽得志⁽¹⁸⁾、以蹙操之術加之於吳、則未知利害之所在也。噫、二子皆逐於利、而不雜於害。酈生之謀、不可用於漢。則魯肅之計、豈得行於吳也。

漢のために六國の子孫を建て項羽の勢力を削ごうとした酈食其の考えに張良が反対したことを例示し、「魯肅は關羽を手なずけて曹操を圧迫させようとしたが、もし關羽が曹操を圧迫する術を呉に与えれば、(呉にとって)利害の所在は分からなくなる」と説き、「關羽を手なずけようとした魯肅も、それを非とした呂蒙も、利と害を取り混ぜて策を考えるべきところを、利しか追い求めていない」という。いずれの意見をも是とはしていない見解であるが、それでも同論は最後に、「酈食其の策を漢に用いることができなかつたように、魯肅の計も呉に用いることはできまい」と言い、少なくとも魯肅の見解を不可としている。これは、劉備に荊州を貸し与えるという魯肅の見解を高く評価した前出史料の論と矛盾するようであるが、先の論では「劉備に荊州を貸すのはあくまで權宜である」とも言っている。つまり、赤壁直後には劉備を味方にするのは利があつたが、事ここに至つては關羽を放置するほうが呉には危険である、というのが『博議』の主張なのであろう。当時において關羽の地位向上はそれなりに進んでいたはずであるが⁽¹⁹⁾、この論を見ても『博議』には關羽を討つ策の提唱に何の躊躇も感じられず⁽²⁰⁾、あくまで孫吳にとつての最善手を検討する、という姿勢が貫かれていることも確認しておきたい。『博議』は続く「呂蒙勸孫權討關羽⁽²¹⁾、全據長江、以張形勢」でも、

孫吳の荊州奪取を肯定とまではいかぬにせよ当然のこととして受け止めている。

「受魏封爵」は、南宋が金とどう接すべきかについて正面から論じた興味深い論になっている。

臣燾曰、(中略)昔高祖受(項)羽之封、勾踐爲夫差之役、皆蓄其力以待其變、却抑士氣以激其憤、(中略)何獨於吳不能哉。吳之稱藩於魏也、兵未嘗一日加吳、使吳因其暇時、保養休息、練兵秣馬、俟其陳留王之怨起於内、諸葛亮之兵攻於外、鬪亂(2)交汨、疾起而躡之、則天下可圖。惜其能示弱以緩敵而謀之不深、卑身以驕人而持之不久、不忍憤憤之氣、改元稱號、臨江拒守、以致魏兵今年入濡須、明年入淮上、又明年入渦口、歲歲相持、不暇休息、以成大舉。視漢祖・越踐、得無媿乎。

孫權が曹操に対し臣と称したことについて、かつて劉邦が項羽の封を受け、勾踐が夫差に仕えたことを例示し、「吳が魏の臣と称している間は魏から攻撃されることはなく、その隙に休息し力を蓄え、魏内外の異変を待つて出兵すれば天下統一できる」といい、臣従の姿勢を見せたことを肯定的に見ている。同論は続けて「ところが惜しいことに、謀略が浅かったため、臣従の姿勢を長く維持せず、改元して号を称し、長江に臨んで守りを固めたため、毎年魏の攻撃を受けることとなった」という。胡論文は斯かる論を、金と南宋の君臣・叔侄の関係について説いていると指摘するが、まさにその通りであろう。直ちには金との対立を決定的にするべきでなく、暫くは頭を下げてでも國力を充実させるべきだという『博議』の主張がはっきり読み取れる一段である。

ただしもちろん『博議』は、金に心服してしまえと言いたいわけではない。続く「魏使邢正(23)至吳、吳之群臣皆懷憤怨」では、そのことが見て取れる。同論は、邢貞が曹丕の使者として吳にやってきたとき、その無礼な態度に張昭らが憤っ

たことを高く評価し、「孫氏は便宜上よしみを講じ戦をやめているとはいへ、群臣の気は慷慨奮発しており、押さえ込めぬものであった。君子はこれによって呉を屈服させることができぬことを知ったのである」という。前掲「受魏封爵」と連続した論であることから見ても、「國力増強のため隱忍自重すべきではあるが、心までは屈服しないぞ」という意思表示であるとも読めるし、主戦派からの批判に予防線を張ったとも読めるであろう。逆に言えば、魏に臣従した孫吳を肯定的に論ずることが、当時においては慎重を要する行動であったことが分かる。

「魏將曹仁以步騎數萬向濡須、人馬步涉困、朱元²⁴以爲可破」からの四つの段は基本的に類似した内容で、こちらが動かす敵を疲弊させるのが有利であること、江東がこれに適した地であり、敵を攻め込ませた上で疲弊させてから破るといふ戦法を採りやすいことを論じている。ただし、一方的に守勢に回ることを説いているのではなく、この四段の最後に当たる「孫權使周魴譎挑曹休、率兵向皖、陸遜破休²⁵石亭」では「孫權は晩年用兵に倦んで、高祖が項羽を垓下で破り天下を統一したような挙には出なかつた」と批判しており、南宋が目指すべき最終目標はあくまで天下平定である、という意味表示も忘れていない。

「吳論」も後半にさしかかると、批判的な論調が目立つようになる。「孫權既即皇帝位、議者咸以「權利在鼎足、不能并力、且志望已滿、無上岸之情」²⁶では、孫權が皇帝に即位し、蜀では孫權との断交が唱えられたが、諸葛亮が反対し、孫權に対する評価を述べたことについて、意見を述べている。

臣燾曰、(中略)孫權據長江之巨險、籍再世之遺業、形勝萬萬於漢中矣。而又周瑜欲爲之吞梁益、朱元欲爲之割江南²⁶、商札²⁷欲爲之并許・洛²⁸。臣下不可謂無其人。而孫權志望滿於鼎足、據形勝之地、不爲進取之計、徒限江自守而已。雖時出師、北不踰合肥、西不過襄陽、以示武警敵、無復中原之意。蓋人之立志止此、則不可以

志望之外而責之也。諸葛亮謂「其智力不侔」、非徒失言、亦見所存之淺矣。

「孫權は父・兄の遺業を継承して長江の要害に拠ったが、この地は劉邦の封ぜられた漢中より遙かに有利であった。周瑜・朱桓・殷禮といった(志の大きな)配下もいた。しかし孫權は鼎立するのに満足してしまい、中原を窺う意思は無かった。諸葛亮は孫權を「その智と力が魏と等しくない(から魏と戦おうとしない)のであり、余力があるのに動かないのではない」と言ったが、これはただ言を失しているだけではなく、考への浅さをも見るのである」と評している。孫權が天下統一の壮志を持たなかったことへの手厳しい批判である。また、諸葛亮の孫權評価が浅薄であるとも論じており、珍しいタイプの諸葛亮批判であることも面白い。

「商札以曹氏政衰、勸孫權遣諸葛瑾等攻壽春、陸遜等攻襄陽、又命益州軍于隴右。權不從」では、孫權が殷禮の助言に従って魏を攻めなかったことについて、「曹芳が即位したばかりの魏を攻めれば、許・洛には至らずとも天下の事は定まっていたらう。ところが呉は、しばしば出陣しては引き返し、呉の兵は疲弊しても魏には損を与えられなかった。呉がついに中原を定めることができず、曹氏が鼎足の雄となったのは、孫權が時を遅えぬことは出来ても、時を失しないことができなかつたからである」と説く。「動くべき時に動く」ことの重要性を説いた論の一つと捉えられるが、やはり天下統一を視野に入れていることも指摘しておく。

卷三を見てみよう。「孫權集衆建鄴」²⁹、揚聲將北伐魏。王基策其必不能出、已而果然」では、孫吳が疲弊のため出兵どころではなく、それを魏の王基らに見抜かれていたことを指摘し、「敵に乗ずべき隙があっても、こちらの内部がそれどころでなければ動くことは不可能」と説く。そして「唐藩鎮強」³⁰、杜牧以自治爲上策」³¹。臣謂非特唐之上策、乃吳之至計。其或繼吳者、雖百世而下、治已攻人之術、無以易此」と主張しているが、ここでの「其或繼吳者」とは、

南宋も含まれるとみるべきであろう。「攻人」という選択も放棄はしていないが、まずはかつて杜牧も説いた「自治」こそが肝要であり、「攻撃より内部（政務・軍備・人材）の充実が重要」と明言しているのである。非常に現実的な見解であると言うべきであり、恐らく「博議」も、これが著された段階では、まだ南宋は北伐に動くべき時ではないと主張しているのである。

批判的な論はさらに続く。諸葛恪が魏軍を大破した東興の戦いについて論じた「諸葛恪大破魏兵於東興」には、以下のような評価が見える。

臣燾曰、輕敵則無成、玩兵則無震。（中略）諸葛恪之智、安可望孫權萬一。孫權用師於強盛之時。而恪、舉事於政衰之後、動兵於竭力之時。頻年動衆、以與敵國。東興之築、淮南之戰³²、敵一不損、而徒殘其兵、消其威。至晉師之來、兵疲威消、無以禦之。推原所自、恪之罪也。

「諸葛恪は孫權の智の万分の一も望むことはできない。東興における（堤防の）修築と淮南の戦は、魏は全く損失がなく、呉は徒に兵を損ない威を消した。のちに晉軍が襲来したとき防ぐことができなかつたのは、元をたどれば諸葛恪のせいである」という論である。孫吳滅亡の責任を東興で大勝したはずの諸葛恪に帰する大変厳しい評価であるが、これももちろん主戦派に対する諫言的な要素を見出すべきであろう³³。

吳論最後となる「陸抗言「西陵、國之西門」」では、吳論冒頭で提起された吳蜀の連合の重要性が話題となっている。

臣燾曰、(中略)昔者、周瑜用於吳、而欲取劉璋。甘寧用於吳、而欲取張魯。皆欲全天下之勢、以爲進取之資也。孫權信備之言、周瑜北還、而劉備西伐⁽³⁴⁾、蜀⁽³⁵⁾定而勢分矣。天下之勢既不能全、則孫權命世之英、諸葛亮一時之傑、約從締交、相與爲一、以共苦魏。(中略)而孫權因關羽⁽³⁶⁾之嫌、稱臣於魏、絕好於蜀、以自斷其右臂。(中略)臣常思、吳之爭天下、上策莫如全天下之勢、中策莫如固天下之交、最下自守而已。始不用周瑜、以無蜀而自守、終不用陸抗、以無蜀而至於速亡。後之有天下者、據吳奄蜀、大勢已合、而不藉外交、則可以爲孫權之所不能爲者矣。

「周瑜は劉璋を取ろうとしたが、孫權は劉備の言を信じて益州攻撃の軍を引き返させ、劉備が蜀を征伐してしまったため、「天下之勢」は全うすることができなくなった。それでも孫權・諸葛亮といった英傑により吳蜀は盟約を結んで魏を苦しめようとしたが、孫權は關羽を討ち取り、魏に臣下と称し、蜀と断絶した。これは自らの右腕を断ち切ったようなものである。臣が常に思うことには、吳が天下を争うのに、上策は「天下之勢」を全うする(＝吳が蜀を領有すること、中策は「天下之交」を固める(＝吳が蜀と連携すること、下策は自守だけである。周瑜・陸抗いずれの意見も採らなかった吳は滅亡した。のちの天下を取った者は、吳蜀を兼ね備え、大勢はすでに合しており、外交せずとも孫權のできなかつたことを為すことができたのである」という論旨である。劉備が孫權を騙すかたちで益州を領有したことも批判的に評しているが、孫權の關羽襲撃も「自らの右腕を断ち切った」と強く批判しており、『博議』の論旨が「蜀吳が一枚岩であることが天下を争う必須条件」というものであったことがよく分かる。ただ、これに従えば南宋はこの条件を満たしているはずであるが、『博議』は前述のように「自治」の重視を説いてもおり、吳蜀が一つであることは直ちに北伐へ直結するのではなく、政權存続の最低条件とみていた、と見るべきなのかもしれない。

(五) 東晉論以降

吳論の終了後は、東晉論、宋論、齊論、梁論、陳論と続く。以降、『博議』の孫吳観が看取できるものをいくつか見しておく。

引き続き巻三の東晉論の冒頭では、東晉の君臣と比較して孫權を高く評価している。「東晉の元帝は乱世をおさめる才能はなく、王導は経世の才を持たなかった。攻勢に出ることもなく、守りも尽くしきつてはいない。孫權は忠義に厚く頼ることのできる部下を選んで江陵を守らせ、呂蒙に濡須口に塙を作らせ、みずから兵を率いてその塙を守った。東晉は王敦を荊州に鎮させ、蘇峻に歴陽を守らせたが、この二人は背いた。その後、庾亮・庾翼・殷浩・桓温らの出兵案に、蔡謨・王述・王羲之・孫綽らが反対した。討伐が成功しなかったとはいえ、これは東晉の君臣が怯えすぎ、習慣を遵守するのにつとめすぎたことにもよる。肥水の戦いのあと、謝安は中原を窺うこともできたのにそれをしなかった。王導も謝安も東晉の偉人ではあるが、彼らは意を北に向けず、他の人は平凡無能で、五胡は晉にとつても「不討之讎」となった。痛恨である」という。優れた忠臣として呂蒙が挙げられており、東晉と比べ孫吳の君臣を高く評価していることが分かる。

祖逖を高く評価する「祖逖北伐後趙、留鎮雍丘。自河以南、皆歸于晉」でも「自孫氏立國於南、以呂蒙・陸遜之英雄、不敢上岸輕議其地」と論じ、呂蒙・陸遜らが高く評価されている。同論は他にも比較対象として、北伐を敢行した桓温・謝玄・劉裕・宋文帝を挙げ、祖逖はそれより優れているという論旨なのだが、『博議』が呂蒙・陸遜を相当の名將と評していることが分かる。

「趙人屢攻陷襄陽、晉輒復取之、陶侃使元宣³⁷鎮襄陽、趙攻之不克」は、襄陽の重要性を強調する論が展開される。その例として關羽の襄陽攻撃が曹操を恐れさせたことが挙げられ、「雖曹公之善用兵、有不能抗者」という表現が見え

る。『博議』内での曹操に対する呼称は一定しないので(後述)、ここで「曹公」と呼んだからといって曹操に敬意を持っていたとは全く言えないのだが、少なくとも曹操の軍事力は高く評価していたようである。また、「燕使劉翔至建康、勸晉公卿先從事巴蜀」では、「漢高祖・唐太宗之先關中、漢光武之先河北、魏武帝之先山東、皆勢也」という。曹操を劉邦・李世民・劉秀と同列に論じていることは高い評価の表れと見て良いが、先に指摘した通り、『博議』は孫權も劉邦・劉秀に比しており、『博議』の三國論が、曹操のみを、あるいは孫權のみを「創業の偉人」と位置づけるものであるとは解できない。『博議』における一尊的三國論の欠如がここからも見出せる。

「元温³⁸ 伐漢、遂定巴蜀之地」では、「惟其得蜀據吳、命忠義之將如祖豫州者、付之外閫、又何患中原之不能復乎」と述べ、吳論などで繰り返し強調されてきた吳蜀を一つとすることの重要性が再度説かれる。

卷四「元温討姚襄至洛陽」は、吳を中心に三國を説く同書としては珍しく、曹操を中心とした論となっている。論旨は「桓温が姚襄を討ち取れなかった責任はそもそも殷浩にある」というもので、姚襄に不義の心を生じさせたのは殷浩が彼を疑ったからであると批判し、それとは対照的な人材活用術の事例として、曹操の人材活用および人材処断の巧みさを高く評価している。斯かる曹操への高い評価が見られることから、孫吳を中心に三國時代を捉える『博議』が、孫吳賞賛と表裏して曹魏を批判・否定という図式になっていないことが、ここでも確認できる。

卷五「謝元³⁹ 破苻堅於淝水」では、苻堅が淝水で大敗した理由について、非常に短く論ずる。

臣燾曰、智者不獨知人、亦必有以知天。蓋人可以力取、可以智勝。而智謀衆力所不能爲⁴⁰者、天而已。況禮樂之地、正朔所在、天意眷佑、不可與爭。苻堅恃區區之衆、欲以勝天、其愚甚矣。智如信、勇如布、威如莽、天所不與、終膏斧鉞、況下於此者乎。故王猛・苻融・丁寧爲堅言之、彼蓋知此者矣。

「智・力も天に背くことはできないのであり、まして、礼楽の地・正朔の所在は天の庇護があるのだから、争うべきではない。天に勝とうとした苻堅は甚だおろかである」という論旨である。似たような論は前述の「總六朝形勢論」にもあり、これを見る限りでは『博議』にも「正朔の所在」への関心が存在したようである。だが、それを「正統」と言わないあたりが、宋代の正統論隆盛の潮流に『博議』が便乗していないことを窺わせるようで興味深い。また三國論という視点からは、吳論においては「正朔」をめぐる見解が展開されず、東晉論以降になって初めてこの観点が述べられるのも注目に値する。

同じく巻五「劉裕東還、留其子義真守長安、私命沈田子殺王鎮惡、自是諸將不和」では、王鎮惡と沈田子の不和から沈田子が王修に殺害されたことについて、「才能ある人々同士で衝突しないように、配置場所を分けてその才能を尽くさせ、お互いに害を与え合わないようにするのは主の能力による」とし、成功例として光武帝の寇恂・賈復の活用、諸葛亮の楊儀・魏延の活用を挙げている。先程は人材活用の先例として曹操が例示されていたが、「優れている先例は三國の別を重視しない」という態度が明確であり、この点もやはり宋代以前によく見られた三國論的な性格を感じさせるものがある。

この傾向は、巻六④「魏寇青・兗・冀三州、何承天陳四策」でも見られる。ここでは「曹操之謀天下、先由許・洛、司馬懿之謀吳、先由淮泗、諸葛亮之謀魏、先由渭南。先謀根本、後謀攻守、此策之上也」と、曹操・諸葛亮・司馬懿の戦略を同時に上策として讃えている。諸葛亮と司馬懿を同時に賞賛する（讃えられているのは、司馬懿の対吳政策と、諸葛亮の対魏政策であり、矛盾は無いのだが）というのは、余り他に類例が無いケースであるように思われる。

巻七「魏主攻盱眙、不克、退走」では、北が南を攻撃して敗北したことについて論じ、曹操が赤壁で敗北した理由についても見解が述べられる。同論によれば、「曹操は漢を呑み込む意思を持ち、袁紹らを滅ぼし、またさらに孫權・

劉備を配下にしようとし、厭くことがなかった。誰がこれを忍ぶことができようか。呉の人々はひとたび怒るや、孫劉ともに奮起し、曹操は敗北に追いやられたのだ」という。同論は続けて、苻堅や北魏の太武帝の南方討伐が不首尾に終わった原因についても分析するのだが、その論旨は「東晉・宋は弱かったが、正朔の所在であり、苻堅たちはこれを臣下にしようとしたが、少しでも知識のある者は、誰が左衽するのに甘んじようか。晉・宋はこれにひとたび怒るや、士民ともに憤り、秦・魏いずれも敗走した」のだという。東晉・劉宋の勝因を正朔の所在であったことに求めるのに対し、曹操と孫權の対立構造については、いずれに正朔があるということも述べておらず、単に曹操の飽くなき野心を批判的に描写するにとどまっている。そもそも『博議』には三國の正朔の所在について論及した箇所が一つも無いことから考えても、三國時代の正朔の所在について論ずる意図が無い、ということであるように思われる。

同じく卷七「魏人瓜歩之役、破南兗・徐・兗・豫・青・冀六州、殺掠無餘」では、「勝天下」の実例として曹操が挙がっている。「項羽が暴を為すと劉邦は義を為し、袁紹が乱を為すと曹操は整を為した。相手が為さぬことを為すことにより、天下は劉邦や曹操に帰したのである。北魏は強かったとはいえその性質は未だ改まっておらず、残忍な行いをした。このとき劉宋文帝が良い行いにつとめれば、河南・河北の民は王師の来ないのを憂える(早く来て欲しいと思う)ようになったであろう。ところが文帝の行いは索虜と大差無いものであり、実施された政務が等しいのに勢が敵せぬとなれば、逆に敵が勝利してしまうのも当然である」という。ここでは孫權や孫吳に対する言及は一切なく、劉邦と並ぶ天下人として曹操が挙がっているのが注目される。

続く「江南白丁、輕進易退」では、諸葛亮・孫權の用兵を讚える内容が見られる。

臣燾曰、(中略)秦人勁、晉人悍、當輕用之。吳人脆、蜀人懦、當重用之。昔者、武侯之用蜀、用以法。孫權之

用吳、用以將。爲節制之師、不動如山、攻掠如火、故對魏而蜀人不敗。遷潘・呂之徒、將如龍虎、士有所恃、故對魏而吳人不敗。移吳・蜀之人、爲秦・晉之性、兵家之用、至此而後神矣。

同論によれば、吳や蜀の兵は脆くて懦弱であるが、諸葛亮や孫權が厳格な軍律や頼れる猛將を活用することで、北方と戦うことができたのだという。ここには無論、南宋の兵士が強くないという彼の思いが投影されているとみるべきであろう。

卷十の陳論にある「吳明徹伐北齊、收復淮南之地」では、再度荊州の重要性が論ぜられる。また同論では「薦紳之議以爲、孫權勇而能斷、陸遜忠而能謀、臣主俱賢、故能保有江南、以遺後人」とも述べており、これがどこまで当時の輿論を実際に反映したものかは分からないが、少なくとも陳の君臣よりは孫吳の君臣のほうが優れているとみられていた、ということであろう。陳の君臣を賞賛する『博議』の論は、当時にあつては珍しかったのかもしれない。とまれ、ここでも『博議』は、呂蒙・陸遜の荊州・益州攻略という戦略を肯定的に見ており、両者を高く評価していたことが分かる。

三．『六朝通鑑博議』の孫吳觀の特徴について

これまでに見てきた内容から、『博議』の孫吳論は以下のような特徴があることが分かる。

まず一つめは、対金政策に関する意見が色濃く投影されていることである。『博議』は、何度も天下統一に言及し、晩年の孫權にその意思が無いと批判しているが、一方では北伐にかなり慎重であることを窺わせる内容になっている。

こういった点については前掲の『四庫全書總目』も、「李燾が「恢復之計」を過度には論じなかったことと『博議』の意図が一致する」と指摘しており、また張論文も『博議』は失地回復に積極的とは言いがたいと指摘し、「虞允文が、乾道六年（一一七〇）以降北伐を急ぐ姿勢を弱めたのは、『博議』の影響があつたからではないか」と見ている。虞允文が本当に『博議』を読んだのか、ひいては、政策決定に対し『博議』がそこまで影響力を持ったのかを直ちに断することはできないが、『博議』が北伐に慎重であつたとする点は、首肯すべき見解といえよう。ただし講和のみを説いているわけではないことも注目すべき点で、「守るための攻めは必要」「孫吳が魏に臣従の姿勢を見せたことに倣い、南宋も金に暫時頭を下げてでも国力を充実させるべきだが、決して金に心服するわけではない」「機会が訪れた時には攻勢に出るべきで、そのときに動けるだけの国力を蓄える必要がある」ということが主張されている。いわゆる主戦派、講和派のいずれかに截然と区別できるものではなく、現実的かつ冷静な見解であるが、同時にその主張が多くの賛同を集めにくいものであつたことは想像に難くない。

二つめの特徴は、『博議』の三國論は孫吳を中心として展開されていることである。序論にあるように、同著述は六朝の歴史を鑑として南宋の現状に活用しようという意図が濃厚であり、かかる同著の執筆の趣旨からいって孫吳中心の論となるのは当然といえは当然であるが、ここまで孫吳を中心に三國を論じ、孫吳が天下統一するために採るべきであつた方策を検討する論は、中國通史の中でも稀有であるように思われる。その論点多岐に及び、ここではその総てを紹介することはできなかつたが、孫權の賢君ぶりや、それを支えた周瑜・魯肅・呂蒙・陸遜らの戦略に対し、高い評価が繰り返し語られる様子は、魏蜀を中心とした三國論に馴染んだ我々には、新鮮に感じられる側面もある。もちろん、孫權の戦略の誤りを手厳しく批判する論も多数あり、「孫吳を讃えることで南宋を正当化・賛美する」といった安っぽい論になっていないところに、孫吳の失敗から教訓を得ようという『博議』著者の冷静な観察眼が看取できる。

こういった『博議』の孫吳論の存在は、当時において孫吳が等閑視されていたわけではないことを示すのに十分である。

またこの関連で指摘すべき三つめの特徴は、蜀出身であるはずの李燾⁽⁴²⁾の著作とされる『博議』から、蜀漢を鼻負しようという意思が全く見えないことである。劉備や蜀漢による天下統一を願う論が一つも無いだけでなく、周瑜の死により彼の益州領有計画が成らなかつたことを惜しんだり、呂蒙の対關羽政策を比較的肯定的に捉えるなど、蜀漢に敬慕や同情の念を持つ論者には到底受け入れられそうもない論が次々と展開される。四庫全書収録の『博議』が、關羽をめぐる記述について相当の改変を加えていることは既に指摘した通りである。南宋においてこういった三國論が存在したことは、少なくとも『四庫全書總目』の『三國志』にて説くような「南宋の人は状況が似ている蜀漢を帝とした」とは異なる有力な事例とみることができよう⁽⁴³⁾。

そして四つめの特徴は、いわゆる正統論的な観点の不在である。管見の限り、『博議』の中に「正統」の語は一度も登場しない。南宋の士大夫が正統論の存在を知らぬとは思えないので、『博議』中に一度も「正統」の語が用いられていないのは意図的であると思われる。換言すれば、『博議』は歐陽脩以来の正統論隆盛の流れに意図して乗っていない可能性が指摘できよう。

そして実際、同著の正統論的性格の不在は確かにある。確かに同著は孫吳を中心とした三國論であり、「どうすれば孫吳が天下を統一できたか」という点を研究する内容となっている。そこには孫吳への肩入れの姿勢、南宋の現状を孫吳に投影するという視点が疑いなく存在する。ただし、蕭常のような蜀漢正統論者と『博議』の決定的な差異は、『博議』は孫吳だけを高く評価しているわけではない、ということである。『博議』は、同著にて幾度か「正朔」の語を用い、東晉南朝が正朔の所在であるとは言っているが、正朔が吳にあるとは一度も言っていないし、むしろ既に見たよ

うに、北方の曹魏と江東の孫呉の關係は「中原を領有する「夷狄」と、江南にいる「中國」と同じではない、と明言している。しかも『博議』は、曹操や諸葛亮など孫呉の敵國人士を賞賛する論をたびたび展開しており、呼称も孫權はもっぱら呼び捨てであるのに対し、曹操は「曹操」「曹公」「操」、諸葛亮は「武侯」「孔明」「諸葛亮」というように、様々な呼称が用いられる。また、『博議』宋本の巻頭には、「三國譜系圖」があり、そこでは魏の君主は「武帝」「文帝」「明帝」「齊主」「高貴郷公」「元帝」と表記され、蜀の君主は「先主」「後主」となっているのに対し、呉の君主は「權」「休」「亮」「皓」と呼び捨てになっている。これだけ見れば孫呉君主だけ貶めていると読めなくもないが、恐らくそこに褒貶の意図は無く、『三國志』の呼称をそのまま用いたのであろう。このように『博議』には、三國人物の呼称の使い分けを以て褒貶の意を込めるといふ拘りは認められないのであつて、蕭常『續後漢書』が劉備を基本的に「昭烈」と表記する拘りを見せているのとは対照的である。このような点からも、『博議』に「孫呉正統論」を含め一尊的な三國正統論を展開しようという意図が無かつたことは明白である。

この「正統論の不在」という特徴は一見、上述の「孫呉中心の三國論」「蜀漢支持の姿勢の不在」という特徴と矛盾するようであるが、『博議』が三國のうち孫呉に最も重点を置いて論じているということは改めて強調しておきたい。『博議』は、一尊的正統論の観点から孫呉を「正統」と断ずることこそないし、蜀漢・曹魏人士も肯定的に論ずることはあるが、総じて見れば南宋の典範・鑑戒として孫呉を捉え、結果として孫呉に最も肩入れた記述となっているのである。

おわりに — 根付かなかつた孫呉正統論 —

『四庫全書總目』が指摘するように、蜀漢を「帝」とする説を唱えた南宋諸儒は少なくなかつた。蕭常『續後漢書』など

はその分かりやすい一例と言えよう。それに対し『博議』は、蜀漢を「正統」とする立場を採らず、孫吳を中心に三國を論ずる内容となっている。『博議』の孫吳論は、南宋と孫吳の境遇が極めて近いことを出発点として展開されており、こういった孫吳論が存在したことは、宋が南遷後ただちに蜀漢を支持する意見一色となったわけではない、ということを示す事例として非常に興味深い。「はじめに」でも述べたように、南宋の置かれた境遇は蜀漢よりも孫吳と類似していたと見るべきであり、『四庫全書總目』が解くような、「単に置かれた状況が類似しているから」という理由だけで蜀漢正統論が擡頭した、という解釈には再考の余地があることが分かる。『博議』の孫吳観は孫吳の称揚に徹したものでないものの、こういった史観を展開する論者が多ければ、三國正統論の一派として孫吳正統論が有力な存在となる可能性も十分にありえたであろう。

ただし、結局孫吳正統論は根付くことはなかった。後世に対しては圧倒的に蜀漢正統論的な言説が影響力を持った一方、『博議』が説くような孫吳論はほとんど後世の耳目を引くことなく現在に至っている。その理由を少し考えてみたい。胡論文は、『博議』が顧みられてこなかった理由を二つ挙げている。理由の一つは、同書の時代に応じるといふ性質が余りに明確すぎることであり、南宋と六朝が置かれた境遇が酷似していることから『博議』は六朝に仮託して南宋を語っているが、かかる局面が南宋以降は見られないことから、同書の時代に応ずるといふ性格が価値を失ったため、顧みられなくなったのだという。そして顧みられなくなった二つめの理由は、『博議』の史書としての完成度の低さに求めている。また張論文は、元々『博議』は公開されたものではなく、進諫のための史論読本だったのではないかと指摘する。胡論文の指摘する理由のうち、一つめの指摘は一定の説得力を有するとは思われるが、この論理で考えたとき、魏蜀吳といった三國鼎立のような時代が三國時代以降見られなかったにも拘わらず、三國時代を論じた後世の論者が少なくなかったことを考えると、『博議』がほぼ等閑視されてきた理由は、「南北対立の構造がその後あらわれなかった

から」だけでは説明がつかないであろう。また張論文の指摘も当を得ている部分はあると思われるが、宋本（詳細は前述）が現存し、しかもその宋本には「秀國陳之賢」による紹熙三年（一一九二）十月一日の日付入りの序文がついている。となれば、『博議』は李燾没年である淳熙十一年（一一八四）から約八年後ころには公刊されたこととなり、かかる考察に大過ないとするれば、『博議』は同時代にある程度出回ったにもかかわらず、後世に伝わるほどの支持を受けなかったことになる。

『博議』が説くような孫吳論が支持を集めなかった理由として考えられるのは、当時の主戦派、講和派のいずれにも与しない主張であり、多くの人々の共感を得られなかったためであろうことが大きいと思われる。様々な要因によって『博議』という史料の普及度が高くなかったことを踏まえても、その見解を強く支持する者が少なからずいれば、ここまで知名度が低いままということは無かつたであろう。だがそうはならなかった。『博議』の孫吳論を通じた現状把握と提言は、非常に冷静かつ的確である一方、実行は難しく、賛同も得がたいことは容易に想像がつく。また、『博議』が孫吳の魏への臣従を論じたことを見ても分かるように、当時の人々の多くは、孫吳が魏に頭を下げたことを、南宋と金の関係に重ねて見たと思われる。そんな当時において『博議』のような意見を述べれば、「金に好意的なのではないか」と疑われる危険があったかもしれない。斯かる情勢下において孫吳に好意的な言説を主張することが困難であったのは間違いないであろう。

それと比べたとき、蜀漢へ肩入れする議論が支持を得たのは、蜀が北伐に積極的であったことに対し、当時の南宋の人々が賛意を持ったことによるところが大きいと思われる。勇ましく北伐を主張する意見は、その現実性はともかく、少なくとも建前上は当時の南宋における正論中の正論であり、「諸葛亮を見習って直ちに金を討て」という意見は、分かりやすく、賛同も得やすかつたであろう。無論、実際の蜀漢が北伐に積極的である一方、実際の孫吳が蜀漢ほど北伐に積極的でなかったことも、南宋の人々の共感を獲得できたか否かを分けた大きな要因であったことは疑いない。

さらに言うならば、『博議』の論は、宋代以降隆盛している正統論的な観点がほぼ無いことも大きな特徴である。『博議』の三國論は孫吳を中心として展開しているが、「孫吳正統論」とは解釈しがたい側面を強く有している。『博議』の孫吳論は、南宋の現状を投影して孫吳をふくめた六朝を論ずることで、六朝の良い点と悪い点のいずれをも鑑戒とすべしと主張しており、孫吳の天下統一のために採るべき策を論じているものの、三國それぞれの大義名分を論じることとは全く無い。歐陽脩以降、三國のいずれを「正統」と見るかを論ずる論者が多い中で、その潮流に乗らなかつたことも、世間から受け入れられなかつた一因かもしれない。

とまれ、『博議』からは、南宋において、孫吳を中心とした三國論が存在していたことが窺えると同時に、そういった孫吳中心の三國論が徐々に消えてゆく一因も看取できるのである。

注

- (1) 蕭常『續後漢書』は、本稿では内閣文庫本の宜稼堂叢書本を底本とし、傳同治本、叢書集成本、四庫全書本を参照した。田中靖彦・石井仁・中本圭亮「蕭常『續後漢書』の基礎的研究―序および四庫提要の分析を中心に―」（『實踐國文學』九七、二〇二〇年）ほかも参照。
- (2) 李燾の経歴および『續資治通鑑長編』については多くの研究がある。例えば周藤吉之「南宋の李燾と續資治通鑑長編の成立」（『駒澤史學』六、一九五八年）を参照。
- (3) 胡阿祥「六朝通鑑博議」浅説」（『南京曉庄學院學報』二〇〇七年九月第五期。李海榮・金承平主編『六朝事迹編類六朝通鑑博議』南京出版社、二〇〇七年にも「導讀」として収録は、『博議』が『資治通鑑』を節略しているが錯簡が多いと指摘する。
- (4) 本論における大括弧「」で括られた箇所は、それが割注であることを示す。以下同様。
- (5) 典拠は『論語』子路第十三。
- (6) これらはいずれも『宋史』卷三百八十八・李燾傳に見える内容の節略となっている。
- (7) 『宋史』卷三百九十八・李壁傳に、李壁が韓侂胄に迎合したと見なされたことが見える。

- (8) 本論で挙げる先行研究以外にも、たとえば黄苑野『六朝通鑒博議』人名辨疑』（『首都師範大學學報』社会科学版）二〇一〇年第六期）などがある。
- (9) 陳愛平『南宋對六朝南北軍事對峙經驗的理論研究』（『沙洋師範高等專科學校學報』二〇〇六年第三期）は、この時代における六朝期の南北軍事対立を扱った史料として、『博議』のほかに、陳充・吳若『東南防守利便』、李舜臣『江東十鑑』、李道傳『江東十考』、王應麟『通鑑地理通釋』、陳武『江東地利論』、趙善登『南北攻守類考』、胡寅『三國六朝攻守要論』などがある、と指摘する。
- (10) 底本は「祥」につくるが、「禎」に改める。ここでの「祥」は、宋仁宗の諱「禎」を避けた表現と思われる。陳垣『史諱舉例』（科學出版社、一九五八年）を参照。
- (11) たとえば劉偉云『李燾』六朝通鑒博議』淺析』（『新郷學院學報』社会科学版）二十五卷五期、二〇一一年一〇月）。
- (12) 「借劉備荊州」は、四庫全書本では「借荊州以拒曹操」。
- (13) 底本は「徙」だが、四庫全書本に従い「徙」に改める。
- (14) 底本は「權」の字を欠くが、四庫全書本に従い「權」の一字を補う。
- (15) 「撫輯關羽以」は四庫全書本では「輯陸荊州共」。
- (16) 「撫輯關羽」は四庫全書本では「輯陸荊州」。
- (17) 「關羽」は四庫全書本では「荊州」。
- (18) 「羽得志」は四庫全書本では「荊州強」。
- (19) 井上以智爲『關羽祠廟の由来並に變遷』（『史林』二六―一、二六―二、一九四一年に連載）、伊藤晉太郎『關帝文獻』の研究』（汲古書院、二〇一八年）ほかを参照。
- (20) 附言するならば、既に指摘したとおり四庫全書本ではこの段の關羽に関連した表現に相当手が加えられており、關羽を尊崇する清朝としてはこの論を原文のまま採録することができなかったことを窺わせる。
- (21) 「討關羽」は四庫全書本では「襲荊州」。
- (22) 「亂」は四庫全書本では「辭」。
- (23) 「正」は正しくは「貞」。『三國志』魏書二・文帝紀ほかを参照。宋仁宗は諱が「禎」であり、「貞」も「正」と改められるようになった。陳垣前掲書を参照。
- (24) 「朱元」は正しくは「朱桓」。以下同様。宋欽宗の諱「桓」を避けた表記か。

- (25) 四庫全書本ではここに「於」が入る。
- (26) 石亭で呉が魏の曹休を撃破した際、朱桓は孫權に曹休の退路を断つことを願い出、「そうすれば曹休を生け捕りにし壽春を取り、淮南を割き取ることができると述べたが、却下された(『三國志』呉書十一・朱桓傳)。なお『博議』が「割江南」と記す箇所は、『三國志』朱桓傳の該当箇所では「割有淮南」とある。
- (27) 正しくは「殷禮」。他の箇所にも見える「商札」も同様。『三國志』呉書二・吳主傳の赤烏四年条に引かれる裴注『漢晉春秋』を参照。「殷」を「商」とするのは、宋太祖の父の諱、弘殷を避けたもの。陳垣前掲書参照。「札」についてだが、百衲本『三國志』の該当箇所の表記は「殷札」となっている。「札」と「札」が当時において混同されていたのかもしれない。一方で同じく百衲本『三國志』呉書七・顧邵傳には「雲陽殷禮」とある。附言すると、この箇所は四庫全書本では「徐盛」になっている。さらに附言すると、宜稼堂叢書本『續後漢書』呉載記一には「零陵太守殷禮」とある。
- (28) 『三國志』呉書二・吳主傳注『漢晉春秋』に、殷禮が孫權に対し、魏の混乱に乗じ一氣に魏を攻撃するよう進言したが、孫權はこれを採用しなかった、とある。
- (29) 「鄴」は、四庫全書本では「業」。
- (30) 底本は「而」だが、四庫全書本に従い「強」に改める。
- (31) 四部叢刊初編版『樊川文集』卷五「罪言」にて「今者上策莫如自治」とあり、同文内には繰り返し「自治」の二文字が見える。
- (32) 『三國志』呉書十九・諸葛恪傳に「初、權黃龍元年遷都建業、二年築東興隄遏湖水。後征淮南、敗以内船、由是廢不復脩。恪以建興元年十月會衆於東興、更作大隄、左右結山俠築兩城」とあり、これに従えば『博議』のいう「東興之築、淮南之戦」は孫權の行動を指すとも読める。だがこの段の論旨は諸葛恪への批判であり孫權は高く評価されているから、『博議』は「東興之築、淮南之戦」も諸葛恪の行動として扱っているように思われる。
- (33) 張論文は、李燾が、采石磯の戦い(紹興三十一年、一一六一)で大いに功績をあげ要職に就いた虞允文に拔擢されながら北伐反対を主張したことを指摘し、『博議』が北伐積極派であった虞允文に深い影響を与えた「江東十鑑」への反駁として著された可能性を指摘する。『博議』にそこまで明確な虞允文への意見という意図が込められているかは判断が難しいが、同段で見られる諸葛恪への批判に采石磯の戦いが念頭にあった可能性は高いであろう。
- (34) 「備之言周瑜北還而劉備西伐」は四庫全書本では「被髮入山之語召還周瑜」。指しているものはいずれも同じく『三國志』蜀書二・先主傳注『獻帝春秋』の逸話を指すと思われる。劉備は、同盟相手である劉璋を攻めるのはよくないと主張し、孫權

の派遣した孫瑜に「お前が蜀を取るなら私は被髮入山して天下に信を失わぬようにする」といい、孫權は孫瑜を引かせた。

(35) 四庫全書本はここに「既」が入る。

(36) 「關羽」は四庫全書本では「荊州」。

(37) 「元宣」は正しくは「桓宣」。「桓」を「元」と表記するのが宋代の避諱に基づくものと思しきことについては前述。

(38) 「元温」は、正しくは「桓温」。「桓」を「元」と表記するのが宋代の避諱に基づくものと思しきことについては前述。

(39) 「謝元」は正しくは「謝玄」。「玄」を「元」と表記するのは、宋皇族の始祖の諱「玄朗」を避けた表現。陳垣前掲書参照。

(40) 「爲」は四庫全書本は「違」。

(41) 卷六から宋論に入る。

(42) 『宋史』李燾傳によれば、李燾は眉州丹稜(四川省眉山市丹稜県)の人。

(43) 張論文は、本論でも挙げた『博議』卷三・東晉論「元温伐漢、遂定巴蜀之地」に注目し、同段の一部を「惟其得蜀據吳命忠義之將……又何患中原之不能復乎」と引用した上で、李燾の提供する戦略にはすこぶる諸葛亮の隆中对の啓発があると指摘し、そこには四川人としての故郷の地位に対する認知と重視があったという。ただし、この史料の該当部分は本論で引いた通り「惟其得蜀據吳、命忠義之將如祖豫州(＝祖逖)者、付之外闕、又何患中原之不能復乎」であり、諸葛亮および隆中对への言及は全く無く、範とすべき先例はあくまで祖逖となっている。これを以て南宋期における諸葛亮を讃える事例と捉えることは難しいであろう。

〔附記〕本研究は、JSPS 科研費 JP19K00114 の助成を受けたものである。また本稿は、日本中國學會第七十四回大會において令和四年十月八日に筆者の行った口頭発表「南宋における孫吳政權論をめぐる一考察」を元に加筆修正したものである。

(本学准教授・文芸資料研究所兼務研究員)